

クロアチアの首都ザグレブから南東に約70km、人口120人の小さな集落・チゴチュでは、コウノトリ(ヨーロッパ・コウノトリ)とともに暮らす生活が営まれています。

コウノトリは幸せの象徴として住民に広く受け入れられ、100~150年以上前の伝統的な木造住宅の家並みの屋根には、コウノトリが巣を構え、集落全体で約300羽が生息しています。住民はコウノトリをシンボルに伝統的で持続的な暮らし方を守り、主な産業である農業も昔ながらの農法を続けています。

チゴチュ周辺では、コウノトリが餌を確保しやすいよう自然保護ゾーンが設定され、洪水対策でつくられた遊水地はコウノトリの餌場としても機能しています。

こうした取り組みが評価され、チゴチュは1994年にヨーロッパ・コウノトリ村の第一号に認定されました。これを契機にチゴチュを含む50,600haが自然公園に指定され、チ

ゴチュ周辺の自然と人々の暮らしがそのまま保全されることになりました。

現在、コウノトリと共生するチゴチュに魅力を感じ、年間を通して多くの観光客がこの地を訪れています。チゴチュには従来の経済的なモノサシだけでははかれない豊かさがありました。



コウノトリと共生するチゴチュの人々

シンポジウム 国際シンポジウム「これからの河川環境を考える -自然環境の保全・再生の価値-」

主催：国土交通省 協賛：世界銀行



近年、日本の河川では官民連携の自然再生事業が増えつつあり、その経済的な価値も見直されはじめています。そうした背景を受け、私たちの協会が運営を支援し、今後の河川環境のあり方を考えるシンポジウムが、去る10月11日に都内で開催されました。

当日は、会場が満席となる盛況の中、世界的な生物多様性保全に取り組む世界銀行のカーク・ハミルトン氏が「持続可能な発展に向けた生態系サービスと生物多様性の価値評価の取組み」と題して基調講演を行い、国内の河川の自然再生の取組報告とし

て、国土交通省と兵庫県豊岡市の中貝宗治市長がご報告いたしました。

パネルディスカッションでは、ヨーロッパを代表するコウノトリ村の一つであるドイツ・リュージュテット村のユルゲン・ヘルペル村長、千葉県野田市の根本崇市長、さらに生物多様性保全に金融の立場から積極的な取組を行う三井住友信託銀行の金井司氏ら国内外の有識者が加わり、日本の河川における自然環境の保全・再生の価値とこれからの方向性について議論が交わされました。

お知らせ 国際フォーラムの中止について

前号でご紹介した、平成24年10月31日(水)開催予定の国際フォーラム(当協会主催)は、諸般の事情により中止となりました。参加を予定されていた方には大変ご迷惑をお掛けいたしますが、何卒ご理解くださいますようお願い申し上げます。

ランドデザイン総合研究所は、自然と共存する美しいまちづくりの方法を、行政や議会、市民に提案するシンクタンクです。お気軽にご連絡ください。

(公財) 日本生態系協会  
ランドデザイン総合研究所 tel. 03-5951-0244

- 50年先、100年先の世界にひとつのランドデザイン作成
- 海外の先進事例に関する情報提供
- 国の事業を活用した自然と共存する持続可能なまちづくりの提案
- 海外視察ツアーの企画・コーディネート
- 行政職員や市民向けの研修会や講演会への講師派遣
- あなたのまちをテーマとした国際シンポジウムなどの企画・開催

# つかさどる人の NEWS

NO.29  
2012.10 発行

(公財)日本生態系協会  
ランドデザイン総合研究所

〒171-0021 東京都豊島区西池袋2-30-20 音羽ビル  
tel.03-5951-0244 http://www.ecosys.or.jp



コウノトリが4つがいも見られる欧州の環境と経済の調和した美しいまち(クロアチア・チゴチュ地区)

**2010年**10月、愛知県名古屋市で行われた生物多様性条約COP10から2年が過ぎようとしています。生物多様性は、私たちの豊かな暮らしの基盤としてなくてはならない社会資産です。多様な生きものをはじめとした健全な生態系があっはじめて健全な経済や社会がなりたち、将来世代まで含めた私たちの暮らしが持続できます。本年6月に開催された国連持続可能な開発会議(リオ+20)でも、持続可能な発展のためには環境保全と経済成長を両立させた「グリーン経済」が提案されています。今、自然を浪費する時代から、自然を保全・再生しながら経済を発展させる時代に転換していくことが、世界共通の認識となっています。

こうした取組は、地方分権も議論されるなか、自治体の役割と責任はますます大きくなっており、国と地方が対等なパ

トナーシップ関係を持ちながら、国に先駆けて新たな政策を打ち出す自治体に注目が集まっています。しかし一方で、一つの自治体だけの活動ではどうしても限りがあることも現状です。

ドイツでは、今年、約60の市町村が集まり「生物多様性のための自治体同盟」が設立されました。これは、加盟した自治体が連携しながら協働プロジェクトを実施することで国全体の自然再生・保全を進めていくものです。また、各地域で生物の多様性を守り育み、それをネットワークさせていくことで、自ずと持続可能で魅力的な美しいまちを築くことも可能となります。日本でも、より一層こうした自治体の連携を進め、国全体に波及させていくことが有効であり、当協会も複数の自治体の連携による美しく持続する地域づくりの支援を積極的に進めています。

# 環境と経済が調和するこれからのまちづくりへ向けて

ここでは、自然を保全・再生しながら経済を発展させている海外の自治体と複数の自治体による連携組織の紹介をします。

## ヨーロッパ・コウノトリ村ネットワーク

「ヨーロッパ・コウノトリ村ネットワーク」は、ヨーロッパで様々な自然環境を守る活動を行っている NGO・オイロナトゥア (EURONATUR) が事務局となって進められています。

この取組は、第二次世界大戦後、都市化や工業化の発展とともにヨーロッパの都市から姿を消したり、数を減らしたりしたヨーロッパ・コウノトリ\*を保護する地域づくりを進めている自治体を認証し、支援しています。1ヶ国につき1自治体を認証し、そのまちを核として国全体への波及をねらっています。

なお、EU では、自治体が国際的なネットワークに加盟していると、地域づくりに係る助成金の申請が通りやすくなります。地域の自然を守り活かすことで、地域経済の振興につながる仕組みができています。



ヨーロッパ・コウノトリ村の位置図

現在11ヶ国(11自治体)が「コウノトリ村」の認証を受けています



ヨーロッパ・コウノトリは日本のコウノトリより一回り小さく、くちばしは赤く、草原や湿地で主に昆虫類や爬虫類、魚類を食べます。春から夏にかけてヨーロッパで繁殖し、アフリカで越冬します  
\*ヨーロッパ・コウノトリ：標準和名、シュバシコウ。日本にいるコウノトリと別種です

## コウノトリをシンボルとしたヴェリカ・ポラナ市(スロベニア)のまちづくり

「コウノトリ村」の一つであるヴェリカ・ポラナ市では、ヴェリカ・ポラナ地区とマナ・ポラナ地区を中心に、コウノトリをシンボルとしたまちづくりに取り組んでいます。両地区は60~70年前までは畜産業が主な産業であり、牛の放牧による牧草地や周辺の豊かな自然環境があり、そこにコウノトリが生息していました。しかし、近代化による湿地の減少や輸入物の安いミルクや牛肉に押され、湿地や牧草地の減少とともにコウノトリもまたその数を減らしてしまいました。

現在、市では放棄された牧草地や耕作地を買い取り、草地の再生に取り組んでいます。既に50haを取得していますが、将来的には200haの土地を購入する予定です。コウノトリの保護とともに、コウノトリとくらすまちの風景を再生することで観光業に結びつけるとともに、草地管理による雇用の創出、コウノトリという付加価値を付けた畜産業の再生をはかり、自然と経済が調和したまちを目指しています。



▲市長のダミヤン・ヤクリン氏。政府の観光機関に勤務した経験を活かし、コウノトリを保護しつつ、経済の安定に尽力しています

◀人のくらしと自然が美しく調和したヴェリカ・ポラナ市の風景